

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	統括部局：教務機構	担当部局：教務機構
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科) 《全学的な視点》	
中項目	6.1 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針	
小項目	6.1.1 教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか。	
要素	学士課程・修士課程・博士課程・専門職学位課程の教育目標の明示 教育目標と学位授与方針との整合性 修得すべき学習成果の明示	
小項目	6.1.2 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか。	
要素	教育目標・学位授与方針と整合性のある教育課程の編成・実施方針の明示 科目区分、必修・選択の別、単位数等の明示	
小項目	6.1.3 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針が、大学構成員(教職員および学生等)に周知され、社会に公表されているか。	
要素	周知方法と有効性 社会への公表方法	
小項目	6.1.4 教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか。	
要素		

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 各研究科の、課程・専攻ごとに教育目的を学生に明示し、社会に公表する。	→学則、本学ホームページにおける人材養成目的の明記	A	A	A	A	A
2. 学位取得プロセスモデルを学生に明示する。	→規程、内規、履修心得での学位取得プロセスの明記	B	B	A	A	A
3. 標準修業年限内の博士学位授与率を上げる。	→博士後期課程入学から博士学位取得までの平均年数や授与率など	C	C	B	B	B
4. 教育研究上の目的、教育課程の編成・実施方針を適切に管理し、定期的に検証を行う。	→カリキュラムを検討する委員会の開催	B	B	B	B	A

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2011年度に人材養成目的、教育理念・目的・教育目標、3ポリシーを本学WEBサイトに公表し、閲覧が可能となった。さらに2012年度に、一部の研究科を除き、各研究科WEBサイト、履修心得等への公表を完了した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 策定した方針は、各研究科履修心得やホームページで公表した。各研究科の方針を検討することにより、各研究科が自己の教育課程をあらためて見直すよい機会となった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 求められる人材像も年月とともに変化していくため、適宜見直す可能性もある。	☆
		その他	☆

目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院FD部会にて検討を各研究科に依頼し、順次各研究科にて策定した。結果、2011年度に全13研究科(国際学研究科開設は2014年度)で学位取得プロセスモデルの策定、論文審査基準の明示が完了し、研究科ホームページ上での公表も実現した。2012年度には一部研究科を除き、履修心得への記載を完了した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 入学予定者、入学者にとっては学位取得のためのプロセスが明確となるとともに、各研究科内でのフローの再確認もすることができた。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 特になし</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 各研究科にて学位取得プロセスを明示し、審査基準を明確にすることを進め、博士学位取得のためのステップ、計画を指導教員と学生が把握、共通理解して、学位取得を目指せるように取り組んだ。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 博士学位記授与数は近年順調に増加し、2009年度36名、2010年度51名、2011年度60名、2012年度52名、2013年度53名であった。しかしながら、課程博士授与者は満期退学による再入学者が大多数を占めており、標準修業年限内の授与数は少ない(2011年度、2012年度各約10名、2013年度3名)状況である。また、論文博士も僅少である。なお、2006年度後期課程入学生より、入学後6年以内に学位論文提出を学位規程を改正しており、博士学位取得までの年数も短縮されてきている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 学部3年(飛び級)+前期2年の5年一貫課程(カリキュラム)の検討推進、前期課程入試制度の検討、前期と連動した後期課程カリキュラム検討等と併せて指導体制の強化の検討が必要である。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標4	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院教務学生委員会、大学院FD部会においてカリキュラムポリシーの作成を要請し、各研究科においてもFD委員会等を設置して検討のうえ、作成、公開してきた。この結果は、随時、大学院教務学生委員会等で報告してきている</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 各研究科内での検討を促した結果、各研究科内での検証体制はある程度確立した。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 大学院教育改革に必要な情報の提供等を教務(教務機構)が今後も随時提供し、各研究科での検討を進めてもらう。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆